

-therapy と共に図る。SCL に対する Long Air Table の必要性は Behnke (1975) の提唱以来, Miller (1978) および Peason (1979) 等で飽和再圧治療として検討されて来た。今回の我々の報告が今後の参考となることを期待する。

25. 潜水病による骨壊死に対する骨シンチグラフィ

加茂洋志 林 克二

〔九州労災病院整形外科〕
同 高圧治療部

【目的】潜水病による骨壊死の診断は、従来単純X線に頼らざるを得なかった。これだけでは判定困難な場合があり、補助診断として、骨シンチは有用とされているが、骨シンチが、単純X線で認められない骨壊死の早期診断に有効か否かを検討した。

【方法】S58年9月からS59年4月までに、九州労災病院高圧治療部で治療した潜水病患者33名について、単純X線写真と Tc^{99m}による骨シンチグラフィを行い、その所見を比較検討した。単純X線写真は、両肩、両肘、両股、両膝関節を、骨シンチは全身を行った。治療時の病名は、ほとんどベンズが主であり、脊髓型が7例含まれている。

【結果】上腕骨頭については、単純X線陰性(-)で骨シンチも陰性のものが10例、単純X線陰性で骨シンチ偽陽性のもの4例、単純X線陰性で骨シンチ陽性のもの7例、単純X線陽性で骨シンチ陰性のもの1例、単純X線陽性で骨シンチ偽陽性のもの2例、単純X線陽性で骨シンチ陽性のもの9例であった。検査時に、単純X線陰性で、骨シンチ陽性だったものが半年後に、単純X線陽性となった興味ある症例が含まれている。大腿骨頭や膝関節の頻度は少ないが同様の検索を行った。また、潜水歴、潜水深度等についても調査した。